

発達障害への対応から考える 子育ての基本

③ 対応は子育ての基本

医師 元田玲奈



デフォルトは「肯定的に」

	できる子たち	できない子たち
肯定的指導	どちらの指導でも、基本的に「できる」	褒められると伸び、ダメ出しされると「もっとできなくなる」 雲泥の差
否定的指導	差があまりない	

対応の基本は「子育ての基本」

- ・発達障害児にして良いことは、誰にしても良いこと
- ・「**安心**」が発達を促す
- ・レジリエンスを育てる
養育者に求められる姿勢
 - ① 無条件の受容（あなたでいてよい）
 - ② 楽観性
- ・デフォルトは「**肯定的に**」・具体的に褒める



脳の成長に合わせる

- ① 幼児期から小学3年生前後
言って聞かせても理解できない
理解できてもコントロールできない段階
→ 地雷除去作業が中心

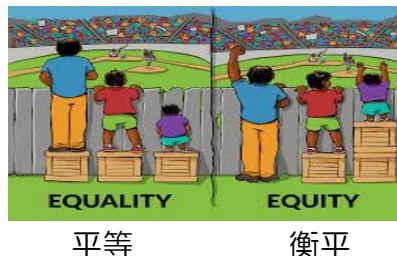


- ② 小学4年前後
自分の苦手に立ち向かおうと思える段階
→ 作戦会議が中心
→ 自己理解につなげる



注 衝動性や多動性は、自然に落ち着いてくる
注 パニックも頻発させないようにすれば、自然に減る

その子の「ちょうど良い」を見つける



- 「できる」を増やす：
ハードルは低く、芽生えの力を優先
難しいことは手伝う
本人が「できた気」になる さりげないサポート

子どもなりの事情を考える

- 「問題行動」という言い方は、こちら側の視点
- 表に見えている現象は同じでも・・・



- 現れている言動から、メッセージ（特性）を読み取る
> 何が困っているのか？ どうしてこうなるのか？

対応のポイント

- 注意や叱責や繰り返しによって改善されない
→ 時期尚早（脳が育っていない）か
方法が不適切（本人の事情に合っていない）
- 増やしたい行動を見たら、その場で具体的に褒める
← ささいなことや当たり前のことでも、
「できた」を発見する（特に注意した後！）
- こちらからの情報を受け取りやすくする
→ 低刺激・視覚的手がかり・分かりやすい表現
肯定的指針（どうすべきか・何が良いか）

対応のポイント

- 「駄目なこと」の一貫性
ダメなことはダメ 危ないことは危ない
と言って良い
かんしゃくを起こせば思い通りに行くと思わせない
- 望ましい言動は、養育者も見本・手本に
- 得意なことを伸ばす・特性を生かす
- 自分の特性を知る



自己理解のたいせつさ

- ・子ども自身が「自分の特性」を知る
- ・その特性は「決して悪いことではない」と理解
- ・その特性には「手助けが必要である」と認識
- ・手助けがあれば「何とかなる」ことを経験
- ・自分自身を「手助けする方法」を身につける



私が意識していること

- ・人は貰ったことがないものは、なかなか与えられない
- ・今、学べば良い（育児は育自）
- ・“**やってみせ** 言って聞かせ させてみて
褒めてやらねば 人は動かじ”
(山本五十六)

